

私たちの生活環境には膨大なモノがあふれている。モノに押し潰された生活。「モノよりこころ」と言われる。しかし、私には、本当に「モノが少ない」と思えてならない。モノではないゴミが店頭や家庭に侵入しているのだと考える。数少ないモノ＝デザインという知恵で生み出されたモノだけを選び出してみたい。それは、コンピュータという物が、モノなのかゴミなのかを見極める「見立て」の能力を開発し、育成することが大事だからだ。大切にできるモノとは、何なのか。現代の生活に、夢や希望をモノでアンソロジーのように語ろうと思う。

デザインという言葉は戦後日本に定着した。デザインはドレスメーカーやファッションという着るモノに重心を置いた言葉となる。デザイナーと言えば、日本人はすぐに数名のファッションデザイナー名を思い浮かべる。デザイナーズブランドもファッション製品が大勢を占めている。日本人のデザイン感覚は服装から始まったわけだ。幸田文の小説「きもの」は、布に対する女性

の美意識が自伝として描かれている美しい文章だ。「しなやかな布地なのに洗濯した後は、肌心地いい適当な固さがつく」など。立原正秋は男性的な視線で男の着物や背広、女の着物や洋装について布をまとった容姿美を詳細な文体で著している。中沢けいひの随筆「男の背中(直線と曲線)」の指摘はさすががいい。ところが、ファッション評論家にはこうした眼差しがまったくない。ファッションをT.P.O

で語るだけである。ファッションデザイナーの1人に三宅一生がいる。彼はインダストリアルデザイン的な発想ができる数少ないファッションデザイナー、いやプロダクトデザイナーだと思う。彼が提示した「一枚の布」というコンセプトは、シンセティック・ファイバーと機械加工という現代技術の生産によって伝統を裁ち切り未来を呼び込んでいる。



# PLEATS PLEASE

## 三宅一生のしなやかな布

伝統＝トラディショナルとは「裏切る」というラテン語の意味を内包しているが、三宅一生のこのファッションは、見事にトラディショナル性をユニバーサル化した。最近発表されたプリーツやツイスト、ウエーブという一連のポリエステル素材を生かしたキモノはその代表作であり抜群のデザインである。

ファッションには本来、素材感や身体との関係性、着ることの意味性が、空間的に時間的に存在感や所有感を満足させる「何か」が、自分をとりまく「物の怪」とをうまく秩序づける。この「物の怪」と自分との対決力のあるモノがキモノ・ファッションではないかと考える。

文学で語られるキモノには、かならず皮膚感覚や登場人物の存在性が反映している。そして布は、まず「しなやかさ」が感覚語として多用され、この言葉に収束される。しなやかさは、肌にとまった時に行動との一体感を機能的に写実する言葉である。この言葉が素材の生命をまず決定している。

絹や綿、毛などの自然素材の繊維は、皮膚の呼吸と空気の温暖寒冷や乾湿、湿潤との関わりがあくまでも自然である。しかし、自然素材はその長所と等価の短所があるものだ。現代は、ハイテクノロジーの繊維が開発されている。それでも、自然繊維の肌触り感覚を超えないと言われるが、それは本当だろうか。

「しなやかさ」・「きしみ」・「ふくらみ」・「しゃり」・「こし」・「はり」・「ぬめり」、この七つの感覚語で布、織り、編み、繊維は評価する。私の住む福井県は羽二重の産地であった。今はポリエステルの世界的な産地になっている。ポリエステル繊維は、完全繊維であり多様な布特性や布機能性を制御できるほどに進

化している。しかし、石油文明の成果であるプラスチック性は代替品としての価値で見られていないのが現状だ。自然布と人工布の使い分けは当然だ。ポリエステルは優れた繊維であることを見直すべきだ。

そのポリエステルに機械加工でプリーツやツイストという半立体的なテクスチャーを与える。そして、幾何学的布地を直線縫製するだけで、身体にフィットさせてしまうという「一枚の布であるプリーツやツイスト」は、これまでのたとえばGパンやTシャツ、トレーナーなどのファッションのアイテムを一挙に拡大させて

JK600  
JK601



しまった。プリーツは、「はり」「こし」「きしみ」といった布の手触り感覚を「しゃり」や「しなやかさ」へと肌触り感覚を「ふくらませて」

いる。ツイストは、微分された「ふくらみ」「しゃり」「しなやかさ」のある人工布を相反する「きしみ」と「ぬめり」に積分化した「こし」感覚に身体を融解してくれる。

プリーツもツイストもボタンやファスナー、ベルトの必要性を消去している。ファッションのフォーマル性とカジュアル性を包み込んでしまった。一枚の布によって身体と世界をだきしめ、解放している。わずかに言えば、Less＝無がMore＝有の効能性や加飾性を生み出している。

映画に登場する未来のファッションには、決まって、ボディスーツやブーツが登場する。中沢けいひに言わせると、子供のプロレスラー・鉄腕アトムが格好が進化した程度の想像力しかない。スポーツウェアやボディラインを顕在化しただけのファッションに未来を落としこんでしまっている。

だとするなら未来のファッションは、人工素材が自然素材の長所をより皮膚化する事で、「一枚の布」で構成した容姿＝かたち(これは立原正秋の表現だが)に

なってほしいと思う。その基本的な容姿＝かたちを三宅一生は見出し、発明し、「PLEATS PLEASE(プリーツ・プリーズ)」と発言してくれた。

デザインの目標である作品、現代から未来への日常的な服装という皮膚感を創出したキモノだと感動し着てみたい。

PLEATS PLEASE 品番 (サイズ、価格)  
JK600 (M/L、12000円)、JK601 (M/L、14000円)、JK602 (M/L、15000円)、JK603 (M/L、14000円)、JK604 (M/L、16000円)、JK605 (M/L、16000円)